



祐介の目

大田ゆうすけ

(福山市議会議員)

No.86

毎月1日号に掲載

これは交通渋滞対策に過剰なインフラ投資を行った道路行政の行く末に似てはいないか。未来図は車社会の終焉を予見している。

ではマイカー社会から公共交通主体のまちづくりに舵を切るべきだろう。例えば京丹後市では赤字バス路線にかなりの税金を投入していたが、思い切って運賃の上限を「どこまで乗っても200円」にしたところ、利用者が倍増して赤字も解消したという。福山の「まわローズ」も運賃を150円から100円に値下げして利用者増を図ってはどうかだろう。

30年後の未来図
昨年、市長の提案で開催された「ふくやま未来づくり100人委員会」は、30年後の福山の未来図の完成をもって終了した。この未来図は福山市HPに公開されているのでじっくり見てほしい。私が子供の頃に流行了ったテクノポリスのな未来図ではなく、歴史・伝統・文化・自然を大切にしようという姿勢が伝わってくる。芦田川から河口堰が無くなっているのが良い例だ。

未来図には車の代わりにドローンタクシーやラッキョウ自動車(軌鉄)、自転車、人力車、水上交通など多種多様な公共交通が描かれている。少し話がそれるが、30年前に映画「私をスキーに連れてって」が流行した当時のスキー場リフトは30分〜1時間待ちという混雑ぶりだった。以降、少子高齢化やレジャーの多様化が進み、温暖化による寡雪もあり現在はこのスキー場も経営が苦しい。

また、鞆に向けてラッキョウ汽車の復活は難しいかもしれないが、検討するだけでも夢がある。フランスのストラスブールなどは駅前から車を排除して路面電車の乗り入れにより中心市街地が賑わっている。路面電車LRTが無理なら、軌道が必要としない連結バスBRTという案もある。先頭車両にラッキョウ型煙突を取り付けるだけで雰囲気がある。

いずれにしても30年後に車を運転できる人がどれだけいるのか、未来図のような社会が実現しないと困るのは我々自身である。未来図の実現に向けて市役所も一丸となって取り組む必要があるだろう。